2002 Winter

明治村だより

冬号 Vol. 30

目次

重要文化財建造物東松家住宅
保存修理工事　西尾雅敏 …2
御料車にみる明治の装飾工芸 ……4
冬の明治村―催しものご案内 ……6
A La Meiji-mura ……7

▶12月から2月の開村時間と休村日のご案内

開村時間
9：30～16：00

下記カレンダーの■が休村日です

12月 2002年

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

1月 2003年

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

『明治村 だより』　第31号発行のお知らせ

発行時期　平成15年3月（予定）

申込方法　「明治村だより」第31号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料140円の切手とともに封書にてお申し込み下さい。

平成14年12月5日発行
「明治村だより」第30号（平成14年 冬）

発　行　博物館明治村
〒484-0000　愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314
◎ホームページ　http://www.meijimura.com

製　作　大日本印刷株式会社

表紙　梅園唱歌圖
楊洲周延
明治20年

重要文化財建造物東松家住宅
保存修理工事

西尾　雅敏

明治村にある十棟の重要文化財建造物の中で数少ない和風建築物「東松家住宅」は日本家屋の例に漏れず、建物老化の進度は遅い。日本の風土にあった造りになっているためであろう。土を焼いて作った瓦を、土を使って屋根に載せ、太めの垂木を遠く跳ね出して深い軒とし、雨風に抵抗するという、より自然を受け流すように作られている。遅いとは言え、老化は着実に進み、何年か置きに修理を必要とする。今回は屋根の葺き直しが主たる工事となった。

現代建築では瓦は殆ど木の桟に引っ掛ける方法で葺かれる。東松家住宅のような伝統的な建物の場合、野地板の上に「トントン」と呼ばれるさわらやヒノキの薄板を防水用に敷き詰め、（薄板を打ちつけてゆく時の音が軽快に「トントン」であるから、その名が付いた。）土を縦筋に置いて、瓦を固定してゆく。田んぼから取った土に藁などを切り混ぜて「熟成」した葺土は粘土のようだが、臭い。瓦を置くと、軟らかい布団のように瓦とトントンの間に隙間なく行き渡って、屋根の形が出来上がる。半月もすると土は乾燥して石のようになるが、接着剤ではないので、強くくっ付いてはいない。だから、風などが瓦をめくり上げたりするのである。おまけに、一旦硬くなった後の葺土は、雨水などで湿っても、今度は粘土のようにはならず、粉々になってゆく。そのため、十年もすると、台風や地震で瓦が浮き、少しづつずれて、雨漏りが進行するのである。

瓦は大量生産品ではあるが、焼いて作るものであるから、一つ一つ微妙に歪んでいる。葺師と呼ばれる屋根職人の親方がその場に応じて少しづつ削り、一枚一枚順番に馴染ませて葺いたものだから、一旦取り下ろして順番が変わるとあちこちに隙間が出来て、雨漏りの原因となる。この住宅は約百年前に名古屋の街中に建てられたもので、昭和四十年に明治村へ移築した。移築のとき、傷みの少ない瓦は再度利用している。風の少ない側に。今回の修理で全ての瓦を新調し、美しい屋根が甦った。

修理が完了して外見上誰もが美しいと感ずるものが、両側面の杉皮貼である。真新しく艶のある杉皮が釣竿のような姿の良い竹で止めつけられた。

数寄屋風建物の老化はその見所の部分に現れやすい。二階北側の十畳の座敷は広縁を介して裏庭に開けている。間口五メートルもの広い視界が座敷からの景色であるが、その間口を支えているのは、直径二十センチにも満たない丸太であって、時の重みに耐えかねて、真中が次第に垂れて来た。丸太の下に無双欄間があるが、移築のときに既に高さを縮めて納められている。今は更に撓みが進み、移築のとき水平に納めた障子の鴨居が中央で三センチも下がっていた。もう欄間で調整は出来ない。丸太を取り替えるのは忍びない。障子が

修理前の東松家住宅

鴨居に細い木を添えた

気持ちよく動く事だけを念頭に、鴨居に細い木を添えて納めた。

大きな日本家屋にはとにかく建具や畳が多い。襖の本数五十四本、大小の障子八十一本、畳は百枚を越えている。

その中で障子の修理が大変であった。細い杉板を縦横に組み合せて作られた障子の桟、細いだけに折れやすい。横桟十本ほど、縦五、六本、折れ易いのは縦桟横桟の交差点。桟を一本取り替えるだけでも、全体をばらばらにしなければならない。なぜなら、織物のように縦横の桟が編まれているからで、ばらばらにすると、余計に折れ易くなる。厚さ二ミリ半ほどの桟を作る時、必ず杉の年輪の硬い線が通るように作る。そうしないと、交差点で更に折れ易くなる。だから、年輪が細かく揃って乾燥した良い木を使わねばならないのである。

襖も障子も、骨や桟は古いものを出来るだけ使うが、紙は一新した。木の古色と新しい紙の艶やかな肌が馴染むのは日本家屋独特の風景である。

壁もほぼ全面塗り替えた。座敷周りの聚楽壁、廊下周辺の黄大津、店周りの漆喰、外部の黒漆喰、おおよそこんな区分けである。今回は上塗りの塗り替えであるから、骨組や荒壁を傷めないように上塗りだけを削り落とすのが要点であった。所々中塗りの補修を行なって上塗りを施していった。聚楽壁や大津壁のように平滑な面が主体の場合は平たく大きな鏝を使うことが多い。一方、外部の漆喰塗などの場合、様々の装飾模様が施されているため、仕上げに際して、ママゴト遊びの道具のような小さな異形の鏝も使われる。

襖の引き手、竹の掛障子

どこかの町で「泥団子遊び」という新しい遊びが生れたと報道されたが、左官の仕事を見ている人達には、同様に熟成させた粘土を、大きな缶の中へ入れて水を満たし、何日も置く。とろとろになってから、細かい網で濾し取ると、藁の中の硬い節などがなくなって、水と泥と繊維だけの混合物となる。まるでお好み焼きの生地のようである。放置すると水が浮いてくるから、少しずつ減らせば、色々な濃度の泥を手に出来る。塗る壁の状態やお天気の具合によって、塗りつける土の水加減を考えて進めてゆく。塗りつけてから鏝で強く押すと水が浮く。そんな時、水を拭き取る事もある。生乾きの表面を鏝でこすれば、こするだけ表面が平滑になって、乾いたとき艶々になる。泥団子遊びと同じである。ただ、泥団子は光っている方が美しいが、壁の場合は、場所による。艶々が良い場所もあれば、穏やかな光が似合う場所もある。

黒漆喰の角を仕上げる

襖や障子はピンと貼った乾いた新鮮さが美しいが、塗り壁は何となくしっとりと湿った感覚が修理後の美しさのようである。

まだ、今回の修理は完了していない。一間にあった竈や間仕切りの板戸を来年復原する予定である。

この文章を書くに当たって、見えない苦労の所を幾つかピックアップしましたが、本来日本建築の職人技は、その手の跡を見えないように仕上げるのを粋としています。どうやって仕上げたのであろうと首をかしげてもらう事が職人の醍醐味でもあります。しかし、読んで頂いた通り、文化財に限らず物を長持ちさせるためには、コスト意識だけでは計れない労りとも遊びとも見えるような細やかな仕事が欠かせない事を示唆しています。

にしお・まさとし　（博物館明治村　建造物担当）

修理後の東松家住宅

明治のりもの博覧会「名残の見学会」

御料車にみる明治の装飾工芸

博物館明治村では平成十四年三月十日から十一月二十四日まで二六十日間にわたり「明治のりもの博覧会」を開催いたしました。館内に展示されている「のりもの」を再認識していただけるよいきっかけとなったのではないでしょうか。この誌面では特に御料車の内部装飾を中心にご紹介いたします。

■五号御料車（昭憲皇太后御料車）

五号御料車の装飾でまず目を惹くのが御座所・女官室・御寝室の天井画の素晴らしさです。天井画は桐柾目の板に直接描かれ、御座所は川端玉章が描いた「帰雁来燕」（写真1）、女官室・御寝室は橋本雅邦の「桜花紅葉」です。二人はともに皇室の装飾を担当する美術家「帝室技芸員」に列せられていたことから、五号御料車の装飾に参画したものと思われます。

つぎに目を奪われるのが玉座（椅子）です。これは華やかなエンジ色の絹緞子地に藤花文様が描かれた布で貼られ、襞をとりボタン留め、豪華なフリンジが施されています（写真2）。ゆったりとした椅子の背には菊花の御紋と菊唐草文を刺繍した背当て布が掛けられ（写真3）、濃いエンジ色と金色の対照で一層の豪華さを演出していますが、堅苦しさを感じさせないのは、椅子と同じ貼り地で覆われたよく使い込まれた痕のある足置台のせいでしょうか。

椅子と同じ布が貼られ、襞とりしボタン留めされた、ボリューム感ある御座所内の腰壁は欅の板目に拭き漆をかけた壁とあいまって重厚な雰囲気をかもしだしています。

写真4

天井の照明器具にもガラス製菊花透かしのシェード（写真4）とそのシェードを留めている座は藤花黒燻に金色に輝く御紋が施されています（写真5）。なお、この車輌には発電機と蓄電池を搭載し、照明はわずか五燭光の明るさしかありませんでした。

御乗降口のある女官室出入口や御寝室の壁面には鏡が嵌め込まれ、室内をより明るく、より広く感じることができるよう工夫されています。また御寝室の鏡の額縁は楓の木を用い、菊唐草文様の浮彫りが施されています（写真6）。そのほか、外から見えないよう配慮されたお厠の摺りガラスにも縁取りに藤唐草の装飾がなされています（写真7）。

写真5

写真6

写真7

写真8

非常に細かなところまで神経が行き届いているのを感じさせるのは、蝶番に施された細かな彫刻です。釘の頭一つ一つまで菊唐草文が丁寧に彫刻され（写真8）、通常は目にしない部分にまで、丁寧な、手を抜かない仕事がなされたことに対して、明治時代の工芸家の熱意、意気込みの並並ならぬものを感ぜずにはいられません。

五号御料車装飾の特徴の一つに「藤花文様」が多用されていることがあげられます。これには次のような理由が考えられます。「藤」は昭憲皇太后の生家・一条家の家紋でもあり、また昭憲皇太后ご自身もお好みであったようで、御料車以外にも明治宮殿で使用された家具などにも藤花が描かれており、この藤文様の緞子はお好みを反映させて製作されたものであると推測されます。

写真9

■六号御料車（明治天皇御料車）

六号御料車は「動く工芸品」とも称されていますが、車内は五号御料車のような華やかさは感じられず、地味という印象すら受けます。しかし細部を見ていくとその装飾の素晴らしさには目を見張るものがあります。

御座所・侍従室の天井には帝室技芸員・川島甚兵衛を中心とした西陣の織物師たちによって制作されたという亀甲の中に菊花の御紋を配した「蜀江錦」（写真9）が張られ、玉座の窓上部の幕板には幸菱文を織り出した大和錦に金糸で菊花の御紋と桐が（写真10）描かれています。御座所出入口上部の櫛形には名古屋の安藤重兵衛の手による七宝で描かれた二羽の鳳凰が菊花の御紋を中心に相対し（写真11）、扉には高蒔絵と螺鈿で「蝶と桐」、「鳳凰と桐」が（写真12）描かれています。

写真10

写真11

侍従室の出入口上部幕板にも桐紋を中心に花や葉が高蒔絵と螺鈿で描かれ（写真13）、下天井には楓の板目に様々な銘木を埋め込み鳥や雲などを描く、木画・木象嵌などと呼ばれる技法を（写真14）用いています。そのほか内部の飾り金具すべてに菊花や唐草などを描き（写真15）、さらに外観も金の装飾を多用し、走行中の姿は人々の視線を集めたことは想像に難くありません。

写真12

写真13

写真14

写真15

六号御料車の装飾の特徴は「菊花」、「桐」、「鳳凰」が多く用いられていることです。「菊花」は香りが高く、古来から薬用としても用いられ、長寿の象徴として、後鳥羽上皇以来皇室の紋として使用されてきたものです。「桐」も同じく皇室の紋として用いられており、また「鳳凰」は桐の木に棲み竹の実を食べるといわれ、瑞鳥の一つに数えられています。いずれも高貴な文様として、天皇や上皇の御服などに伝統的に描かれ、皇室の象徴としてされてきたものです。

御料車の装飾は単に豪華な記念碑ではなく、明治宮殿や赤坂離宮などの造営とともに近代日本の美術工芸界に果たした役割は大きく、江戸時代までに形成された日本の伝統の技を後世へ伝える大きな役割を担ったと言っても過言ではないでしょう。

WINTER 冬の明治村

平成14年12月7日(土)～平成15年2月28日(金)

休村日　12/2・9・16・30・31、1/20・27、2/3・10・17・24

★クリスマスイベント★

クリスマスデコレーション
(～12/25)
聖ザビエル天主堂・聖ヨハネ教会堂ほか
教会堂や洋館が素敵なクリスマスの装いに包まれます。明治村ならではのロマンチックなひとときをお楽しみください。

クリスマスミサ（12/23、11:00）
聖ザビエル天主堂
ゴシック建築の聖ザビエル天主堂で荘厳なクリスマスミサを執り行ないます。

ハンドベルコンサート
(12/23、13:00～)
聖ザビエル天主堂
金城学院中学校ハンドベルクワイアによるハンドベルコンサート。

HOT ホッとギャラリー

東山梨郡役所2階
近岡善次郎の水彩画「明治の洋風建築」をお楽しみいただける暖かなギャラリーです。

常設展「明治の時計」
三重県庁舎2階

建物ガイド

普段入れない建物の内部をガイド付きで公開します。

西郷従道邸・東松家住宅
11：00　11：20　11：40　12：00
西園寺公望別邸「坐漁荘」・呉服座
13：00　13：20　13：40　14：00

ボランティアガイド

定期ガイド
正門・北口各ブース出発時間、11：00・13：30

●新春イベント●

特別展「はつはるの錦絵展」(1/1～2/28)
三重県庁舎
はつはるを彩る花々を描いた錦絵を中心に展示いたします。春を待ち、春を愛でる華やかな世界をお楽しみください。

東京名所 浅草金龍山遠景 新開池之図

「お多福券」プレゼント(12/21～1/13)
期間中にご来村の皆様に、「馬車」割引券や開運ホールの「あそび」割引券などをセットにした「お多福券」をプレゼント。

新春鏡割り（1/1、11:00）呉服座前

祝餅つき（1/2・3、12:00・13:30）呉服座前

正月飾り（1/1～13）

正門・北口・東松家住宅・京都中井酒造ほか
村内の日本家屋を中心に施される、伝統的なお正月飾りをお楽しみください。

開運ホール　千早赤阪小学校講堂
昔なつかしい矢場・射的・輪投げ・サイコロゲームにおみくじや，開運グッズがいっぱい！

明治のくらしよろず体験　三重県庁舎
明治のくらしを体験してみよう。

暗夜回廊　歩兵第六聯隊兵舎
土・日・祝日と1/1～3　1回200円
暗闇の迷路はスリル満点！

予約制ボランティアガイドツアー

団体のお客様を対象にした予約制のツアーです。ボランティアガイドとともに明治村の貴重な建造物をもう一歩踏み込んで見学してみませんか。
所要時間は1時間～1時間30分。
モデルコースもいろいろ取り揃えています。

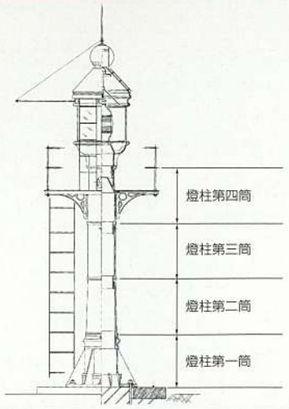
プレミアムガイドツアー

明治の貴重な建造物などの文化財を学芸員による案内付きで巡るガイドツアーです。電動車を使って広い村内を楽々移動。お客様の目的に合わせたルート設定もできます。
所要時間は１時間30分。料金は4名様まで10,000円、5名様12,000円、6名様14,000円です。

問い合せ・予約　TEL 0568－67－0314

※催事は都合により変更する場合がありますので、詳細については事前にお問合せ下さい。

組立て式燈台



53小那沙美島燈台は、広島湾から瀬戸内海への出口、宮島の脇の小さな島である小那沙美島（現荒芸江ノ島）に明治三十七年に通信省航路標識管理所によって築かれた燈台です。高さ六メートル余りと小さな燈台は鉄造りの組立て式燈台で、四段の円筒形筒燈柱に灯篭と天蓋が載せられています。瀬戸内海は多島海なので、巨大な燈台を設置しても燈台の役割を十分に果たすことができないため、島ごとに小さな燈台を設置しました。この燈台もその中の一つです。小那沙美島は平均水面上三十九メートルと小高い島で、燈台を急傾斜の山の上に造る便宜から鋳鉄で造られ、日露戦争をにらんで工期を短縮する目的で組立て式の燈台となりました。

我が国の洋式航路標識は、明治二年観音崎燈台の点燈が第一号です。しかし、当時の燈台設置は主に英国技術者に任せていたので、彼等の利用する航路にだけしか設置されていませんでした。明治中期からわが国の海運は次第に隆盛になり、燈台の設置に対しての不満に燈台設置の再検討がはじめられました。特に広島は戦争のたび多くの物資が積み出される軍事上の要所でした。日露両国間の風雲急は、海軍基地のある呉軍港、宇品港を中心に艦船の往来が激しくなりました。そのため、宇品港及び呉港から広島湾を南下し伊予灘へ抜けるコースに燈台が必要となり、小那沙美島燈台も建設されることになったのです。

写真館のガラス屋根

60高田小熊写真館は有数の豪雪地であり、日本でのスキー発祥の地としても知られる新潟県上越市に明治四十一年ごろ建てられました。一階は待合室と家族の住居で、二階がスタジオになっています。このスタジオには現在の写真館のようにストロボなどの照明器具は見当たりません。そのかわりに大きなガラス屋根があり、穏やかな太陽の光に照らされたスタジオに明治の写真館の俤を見ることができます。

当時、写真撮影をするには感光に大変時間がかかるため（※1）、客は撮影中静止していることを強いられ、写真師達は人工照明のない当時、いかに光を採り込むかに苦心しました。そのため、当初写真撮影は専ら屋外で行われました。明治になり本格的な洋風の写真館が建てられるようになると、屋内へ光を取り込むために写真師達は工夫を凝らしました。天幕式・円球式など様々でした。中でも、欧米のスタジオを手本にしたスラント（※2）と呼ばれるガラス屋根は各地で取り入れられました。採り込む光はハレーションを起こす直射日光を避けるため、柔らかな北側からの光線が好まれました。

日本で最初にこのスラントを用いたスタジオは、日本写真界の開祖の一人（※3）といわれる上野彦馬が文久二年（一八六二）に長崎ではじめた写真館ではないかといわれていますが、これは定かではありません。明治期の写真で確認できる古い例は明治二年（一八六九、イタリア生まれの写真家ベアト（Beato, Felix）が横浜海岸通十七番に建てた写真館で、二階建ての洋館の屋根の一部に大きなガラス屋根を見ることができます。

スラントを持つハイカラな洋風の写真館の中には、高田小熊写真館のように街のシンボルとなったものもありました。その後、大正から昭和になり写真用電球が国産化されるようになると、スラントはスタジオからしだいに姿を消して行きました。

※1　四十秒くらい。
※2　【英】slant：斜めの意。
※3　同年、横浜で下岡蓮杖が写真館を開業している。

ポーツマスのテーブル

67帝国ホテル中央玄関の二階の一隅に、一台のテーブルが展示されています。幅一・二メートル、長さ四・三メートル、高さ〇・八メートル。濃褐色の胡桃材で脚足は六本、表面には緑色のフェルト地が四方の縁の幅一〇センチほどを残してほぼ全面に張られています。そして、テーブルの縁に付けられていた十二×七・五センチの銀製銘板には、英文で次のような内容の文章が刻まれています。

「これは『ポーツマス条約』が日露両国の使節によって一九〇五年九月五日、火曜日午後三時四七分に調印された講和会議のテーブルである。ニューハンプシャー州ポーツマスダンカン宝石店」

日露戦争の講和条約であるポーツマス条約は、ニューハンプシャー州ポーツマス市のポーツマス米海軍造船所にて締結されました。ロシアの全権はヴィッテ（Vitte）と駐米公使ローゼン（Rosen）、日本の全権は外相小村寿太郎と駐米公使高平小五郎。アメリカ大統領セオドア・ルーズヴェルト（Roosevelt, Theodore）の斡旋によるものでした。この結果ロシアは日本に対して韓国に対する指導及び監督権を全面的に認める、旅順と大連の租借権・長春以南の鉄道とその付属の権利を譲渡する、北緯五十度以南の樺太と付属の諸島を譲渡するなど、日本は大陸進出の拠点を得ることとなり、また列強の一員としての地位を固めるきっかけともなりました。そして大きな歴史の定点を見ていたテーブルは今、明治村で静かにその歴史を語り継いでいます。